

## 【2009 皆既日食観測記】

2009.07.28 H.M

いよいよ待ちに待った世紀の一瞬が来る。

昨年に続いて月刊『天文ガイド』主催の観測ツアーに参加した。場所は杭州から300kmほど内陸の池州市である。

ツアーの参加者は、出版社のスタッフをはじめエッセイストなど総勢60数名、中には皆既日食10回以上という日食ハンターもいた。昨年の日食ツアーに同行して顔見知りになった方にも何人か会うことができた。

7月19日 羽田から関空を経て杭州に飛び、空港からバス2台に分乗して池州市まで走る。

観測地は池州市郊外の湖畔の公園で、東経117度30分59.28秒、北緯30度38分55.44秒、標高9mの地点である。

7月20日 中国仏教名山 九華山 観光

7月21日 観測地に行き、周囲の確認や観測機材の点検、そして皆既日食を想定して撮影のリハーサルを行う。

それぞれ工夫を凝らした観測機材が並び、観測地は機材の展示会場と化す。それらを見て回るのも楽しく、勉強になる。

じりじりと照りつける太陽を見ながら全員明日の観測成功を信じて疑わなかった。



杭州市上空



セットアップした赤道儀を前に記念撮影



ペットボトルを利用したバランス



アルミホイルで機材の日除け



試し撮り これが明日は黒い太陽に

7月22日

朝4時頃に目が覚めてしまい、ホテルの窓から空を見ると薄曇り、でも東の空の雲の切れ間に明けの明星が見える。晴れてくれればいいが...

早めに朝食を済ませバスで観測地に移動した。

観測地にはいくつかテントが張られチャイナドレスのお嬢さんがジュースやアイスクリームを売っている。

日本からの観測隊を見に来た人、日食を見に来た人、1000人近い人たちが集まって来た。

池州市の市長さんも視察に来て私達に声をかけたり握手をしたり、熱烈歓迎の様相。

しかし、地上の人たちの期待を裏切るように空の雲は次第に厚くなって来る。

本部テントからスピーカーで、部分食が始まりました、のアナウンス。しかし、太陽は雲に覆われ、欠けている様子は全く観測できない。



池州市の市長に日食を説明



「この雲切れないかなあ」心配そうに空を見上げる

食分90%を超えると周囲はかなり暗くなってきた。相変わらず太陽は全く見えない。湖の周囲の林ではセミが一斉に鳴き出した。ものすごいセミの大合唱である。湖面には魚がピョンピョンと跳ね、自動点灯の街路灯が灯り出す。(写真の時刻は中国標準時)

皆既まであと10秒、9、8、7、... 雲の上を巨大な影がゴースと迫って真っ暗闇に包まれた。

その瞬間大歓声上がる。

市川から来たという物理の先生は周囲の変化をビデオ撮影しながらICレコーダーでセミの声を収録、さらに気温や気圧の変化を克明に記録している。自分も望遠レンズでの撮影はあきらめ広角レンズで周りの状況の撮影に切り替えた。

皆既が終わると地平線付近の雲が朝焼けのように赤く染まり、周囲が急速に明るくなってきた。気のせいかな暗くなる時間より明るくなる時間の方が短く感じた。

日食などを知らない古代の人達はこの自然現象をどう受け止めたろう。天照大神が隠れたという天の磐戸の神話が生まれた背景が想像できる。日食が終わりもとの明るさに戻った。本部テントから缶ビールが配られ皆で乾杯する。ビールの味もイマイチだった。

皆それぞれ他の地域に行った仲間と携帯電話で連絡を取り合っている。上海は雨だったとか悪石島は雷雨で体育館に避難中だとか。

そんな各地の状況を聞いて悔しい気持ちが和らいだのは自分だけではなかったようだ。

帰国後改めて当日の天気図を見ると、南下した梅雨前線が皆既日食帯と重なるように横たわっている。新聞やテレビの日食の映像は前線の南の硫黄島近海の船か雲の上を飛ぶ航空機から撮ったものだけであった。

午後杭州に戻り、宋城や

西湖、花港公園などを観光し

7月23日 帰途についた。

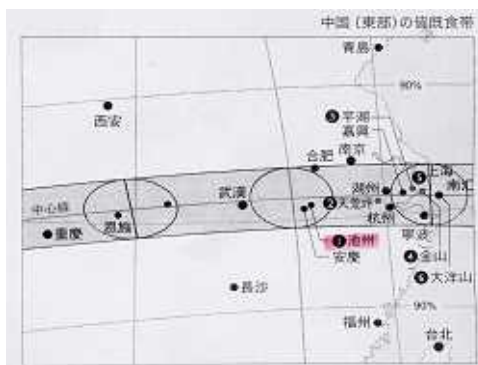
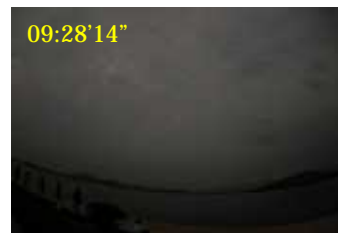
結局全く太陽を見ないまま皆既日食が終わった。

でもセミや魚の生態、そして皆既日食中の暗闇など自然の変化を体験できた。

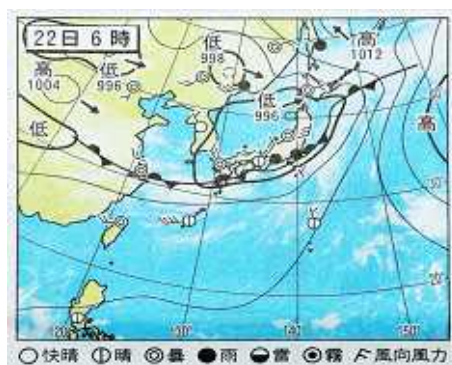
去年は皆既の時間が2分間と

短かったこともあるが、写真撮影に夢中になり周囲の変化は殆ど記憶に残っていない。

次の目標は2010年7月11日、イースター島、モアイの上の黒い太陽だ。



皆既食帯(月の影は西から東へ移動)



当日朝の天気図



7/20 九華山の寺院



7/22 杭州 宋城の演舞場



7/23 杭州 西湖